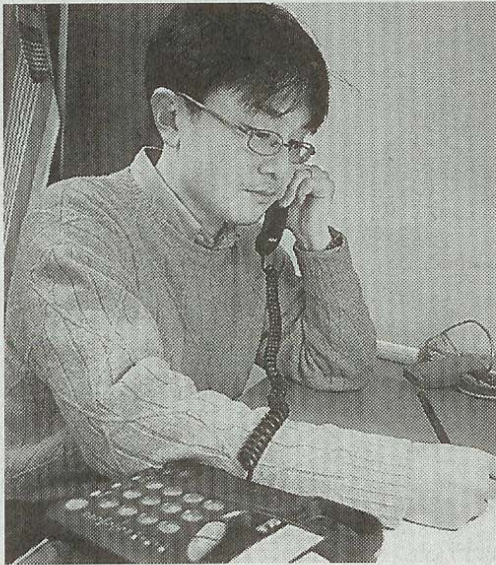


# 男もつらいよ 電話相談じわっ

らしさの縛り一人で解決難しい

「男」悩みのホットライン」。長い人は2時間も話すという大阪市内で



「男はつらいよ」と思っても、「男は黙って」と本音を抑え込む。そんな男性たちのための専門相談が、各地の市民グループや男女共同参画センターで広がっている。発端は、自身も悩みを抱えた男性たちの取り組みだった。ドメスティックバイオレンス(DV)やセクシュアルハラスメントへの戸惑い、増える働き盛りの自殺。激変する社会に揺らぐ男性たちの姿が、そこにある。(竹信三恵子、谷辺晃子)

大阪市内のビジネス街。雑居ビルの一室で月に3回、午後7時の相談受け付け開始とほぼ同時に1台しかない電話が鳴る。「あのお、くだらないことなんですが……」と、ためらいがちな声。男性による男性のための電話相談「男」悩みのホットラインだ。相談は95年11月に始まった。発案したのは、大阪市内で青果業を営む安部達彦さん(53)。子どものいたずらを注意し、きいてくれないと腹が立って手が出た。「こんなにかわいいのに暴力なんて」と自己嫌悪に。そんな時、「男性の暴力」

## 聴いてくれる場 広がる

「男が悩みを打ち明けるだろうか」と不安だったが、10年間の相談は1213件。「男は話したがって」いた。ただ、聴いてくれるところがなかったんです。相談者は10代から70代までさまざまだが、30代が目立つ。最も多いのは「性器が小さい」などの性の悩み(42%)。性的嫌がらせ(セクシュアルハラスメント)は、同性から性器の悪口を言われるなどのいじめがほとんどだという。

「男」悩みのホットライン」。長い人は2時間も話すという大阪市内で

「男が聴く」(かもがわ出版、075・432・2868)にまとまった。相談員で臨床心理士の浜田智崇代表(32)は「男らしさを縛られず、自分のしんどさを伝えて」と呼びかける。現在、相談員は13人。参加希望の会社員らに1年ほどの研修を施す。運営費は相談員たちの会費などで、全員が手弁当。今月には10

年間の活動がブックレット「男の電話相談 男が語る」(かもがわ出版、075・432・2868)にまとまった。相談員で臨床心理士の浜田智崇代表(32)は「男らしさを縛られず、自分のしんどさを伝えて」と呼びかける。「ホットライン」(06・6945・0252)は毎月第1、2、3月曜日の午後7〜9時。